

# 感情経験と自己意識・他者意識の関係

## 感情の種類による違い

小嶋佳子

学校教育講座 (心理学)

### Relations between emotional experience and self- or other-consciousness: The influence of sorts of emotions on those relations.

Yoshiko KOJIMA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### 問題と目的

Kang and Shaver (2004) は、自己の内的側面を意識し、内的思考や感じていることに特に注意を向ける私的自己意識を、感情経験の幅と弁別という側面を持つ感情の複雑性にとって核となる特性であると考え、調査を行った。その結果彼らは、感情の複雑性のより高い個人は私的自己意識がより高いこと、すなわち、感情経験の個人差と自己意識に関連があることを見出した。この研究において感情経験の幅は、日常生活で多くの異なった感情を経験するかどうかや、幅広く異なった感情を経験する傾向があるかどうかといった項目によってとらえられており、同時に複数の感情を経験するかどうかという側面からは調べられていない。そこで小嶋 (2007) は、同時に抱く感情の種類といった、ある特定の時点での感情の複雑性と自己意識との関係を検討し、様々な気持ちの入り混じった感情を強く感じる人ほど、自己の内面に注意を向ける私的自己意識や他者の視点から見た自己の意識である公的自己意識が高いことを示した。

したがって、自己意識は感情経験と深く関わっており、中でも私的自己意識は、感情の複雑性という感情経験における個人差と関連していることが示唆される。ところで、感情の複雑性の高さにも様々な状態があると考えられる。小嶋・森田・松田 (2004) は、喜び、怒り、悲しみ、および驚きの関係を調べ、感情間の関係に個人差があることを見出した。具体的には、怒りが優位で感情間の相互抑制がみられないタイプ、全感情の強度が低く、やはり相互抑制のみられないタイプ、喜びが優位で喜びと怒りの生起が相互抑制するタイプ、全感情の強度が高く、相互抑制がみられないタイプ、全感情の強度が中程度で喜びと悲しみが相互抑制するタイプがみられた。この中で、全感情の強度

が高く相互抑制がみられないタイプと、全感情の強度が中程度で喜びと悲しみが相互抑制するタイプは、いずれも感情の複雑性が高いとみなせるだろう。では、このように感情間の関係のタイプが異なり、感じている感情の種類が異なる場合でも、感情の複雑性が高ければ自己意識も高いのだろうか。

感情の中には、自己意識的感情 (照れ、共感、羨望、誇り、恥、罪悪感; Lewis, 2000参照) と呼ばれるグループがある。これらの感情が生起するには、その名の通り自己意識が必要であると考えられる。たとえば、Lewis, Sullivan, Stanger, and Weiss (1989) からは、他者から注目され、さらに、その他者から注目されている自分というものを意識することによって、照れが生じると推測される。恥の発生メカニズムを検討した樋口 (2002) は、恥の発生因の一つとして、“他者から、私が望んでいない評価を受けるのではないか、と気になる”、“他の人が私のことをどのように評価するか、気がかりだ”、“他者に対して思い通りの印象が与えられなかったのでは、と不安になる”という項目によって測定される“社会的評価懸念”を見出している。このような懸念は、他者から自分はどのように見られているかを意識しなければ生じないであろう。また、有光 (2001a) は、同じ自己意識的感情でも、罪悪感と羞恥心 (恥の意識、コミュニケーション不安からなる) とでは関連する自己意識の側面が異なることを示している。

ところで、小嶋 (2007) は自己意識だけでなく、他者意識と感情の複雑性との関連も調べていた。その結果、同時に感じる感情の種類が多い人ほど、他者の内面に注意を向ける内的他者意識が高く、様々な気持ちの入り混じった感情を強く感じる人ほど、他者の内面や外面に注意を向けたり、他者について回想・空想する傾向がより高いことが示された。有光 (2006) によ

ると、罪悪感や羞恥心と共感性との関係においても、感情による違いがある。他者意識と共感性の関係をみた辻 (1988) は、内的他者意識は共感的関心<sup>1</sup>や視点取得との間に、空想的他者意識は視点取得との間に正の相関関係があることを示した(辻, 1993より引用)。このことを合わせて考えると、他者意識との関係においても、感情による違いがみられると予測される。

そこで本研究は、自己意識の感情を中心に、感情別に自己意識および他者意識との関係を検討する。また小嶋 (2007) は、感情経験が自己意識や他者意識の変化に与える影響についても分析していた。感情によって自己意識と他者意識の関係が異なるならば、感情経験の影響も、どのような感情を抱いていたかによって異なることが予測される。本研究では、この予測についても検討する。

## 方法<sup>2</sup>

### 参加者

地方の女子短期大学の学生117名が本研究に参加した。

### 質問紙

感情経験を調査する質問紙と自己意識および他者意識の質問紙を使用した。

感情経験を調査する質問紙では、前の週に強い感情を抱いた出来事の想起を参加者に求め、その出来事の際に“喜び”、“恐れ”、“驚き”、“嫌悪”、“怒り”、“悲しみ”、“照れ”、“共感”、“羨望”、“誇り”、“恥”、“罪悪感”、“不安”、“抑うつ”、“快活さ”、“倦怠感”、“焦燥感”および“様々な感情が入り混じった気持ち”の各々を感じた程度について、“全く感じなかった”を0、“非常に感じた”を4とする5段階で評定させた。“様々な感情が入り混じった気持ち”を一番最後に呈示し、それ以外の感情の呈示順序はランダムにした。

自己意識、他者意識の調査には辻 (1993) の尺度を使用した。参加者には、各項目が自分にどの程度当てはまるかを、“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”の5段階で評定するよう求めた。

### 手続き

2004年10月12日に自己意識と他者意識の1回目の調査を実施し、次の週の10月19日から1週間おきに10月26日、11月2日と、感情経験の調査を3回実施した。11月2日には感情経験の調査の後に2回目の自己意識と他者意識の調査を行った。いずれの調査も授業時間中に質問紙を配布し、その場で回収した。

なお、感情経験の調査において、感情を抱いた出来事の内容は記入を求めなかった。また、出来事が非常に苦痛で思い出したくない場合は、感情経験の調査に回答しなくてもよいことを教示した。

## 結果

感情経験の調査に1回以上、かつ、自己意識および他者意識の調査に2回とも参加し、記入ミスのなかった参加者のデータを分析の対象とした。ただし11月2日の調査において、感情経験の調査と自己意識・他者意識の調査の実施順序が明らかなでない参加者のデータは、記入ミスがない場合も分析の対象から外した。以上の基準を満たした参加者は80名で、平均年齢20.05歳、年齢の幅は19～41歳であった。

### 各感情と自己意識・他者意識の関係

感情別に評定値を調査参加回数で割った値を、各感情の得点とした。なお“様々な感情が入り混じった気持ち”は以下、混合感情と記す。参加者全体の各感情得点の平均とSDをTable 1に記載した。

自己意識・他者意識の各下位尺度の得点は、“全く当てはまらない”を0、“非常に当てはまる”を4と、各質問項目の内容が当てはまるほど値が高くなるように(逆転項目は当てはまらないほど値が高くなるように)数値化し、下位尺度別に項目数で平均して産出した。Table 1に1回目の調査と、2回目の調査のそれぞれにおける参加者全体の平均とSDを示した。

感情によって自己意識・他者意識との関係が異なるかどうかを検討するため、各感情得点と自己意識・他者意識の各下位尺度得点の間のピアソンの積率相関係数を算出した。相関係数の値もTable 1にまとめた。

自己意識の感情である照れ、共感、羨望、誇り、恥、罪悪感と自己意識との相関をみると、罪悪感と自己意識のすべての下位尺度との間に有意な正の相関が示された。恥および羨望は、私的自己意識との相関係数が有意傾向であった。また、照れと社会的不安との間に有意な負の相関がみられた。他者意識との相関係数をみると、罪悪感と内的他者意識の相関係数、照れ、共感、恥と空想的他者意識の相関係数が、有意または有意傾向であった。

自己意識の感情とそれ以外の感情において相関係数が有意であった割合は、各感情全体の20.8%と42.4%であり、自己意識の感情の方が高いということとはなかった。

次に、罪悪感を制御した場合の照れと私的自己意識、公的自己意識との偏相関係数をSPSS 12.0 for Windowsを用いて算出した。同様に、罪悪感を制御した場合の恥と私的自己意識、公的自己意識の偏相関係数、照れおよび恥を制御した場合の罪悪感と私的自己意識、公的自己意識の偏相関係数も求めた。照れと罪悪感のピアソンの積率相関係数の値は.19、恥と罪悪感の.41であった。偏相関係数を求めたのは、本研究の結果を有光 (2001a) の結果と比較するためである。有光の調査では、かっこ悪さ、気恥ずかしさ、自己不全感、性の4因子からなる質問紙を羞恥心の測定に用

Table 1 各感情の得点，自己意識・他者意識の下位尺度得点の平均（SD）と，感情得点と自己意識・他者意識の下位尺度得点の間のピアソンの積率相関係数

感情	平均値 (SD)	自己意識尺度				社会的不安				他者意識尺度			
		私的自己意識		公的自己意識		1回目		2回目		内的他者意識		外的他者意識	
		1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
喜び	2.09 (1.16)	.01	.00	.09	.01	-.13	-.09	-.01	-.09	.03	-.01	.13	.03
恐れ	1.41 (1.05)	.34**	.30**	.13	.07	.12	.12	.22†	.34**	-.04	.03	.16	.25*
驚き	1.93 (1.10)	.01	.09	.08	-.11	-.02	-.03	.06	.04	.02	-.02	.07	.11
嫌悪	1.74 (1.08)	.24*	.20†	.22†	.09	.11	.20†	.29*	.40**	.03	.16	.17	.23*
怒り	1.59 (1.13)	.20†	.19†	.22*	.09	.15	.19†	.23*	.31**	.07	.08	.09	.08
悲しみ	1.74 (1.02)	.32**	.32**	.31**	.18	.15	.14	.18	.27*	.03	-.04	.03	.08
照れ	1.34 (1.05)	.00	.01	.12	.07	-.23*	-.12	.12	.01	.04	.04	.19†	.19†
共感	1.79 (1.15)	.03	.10	.14	.06	.01	.11	-.03	-.06	-.04	-.08	-.10	-.19†
羨望	1.18 (0.99)	.21†	.19†	.18	.09	.15	.17	.12	.14	.18	.17	.08	.08
誇り	0.80 (0.82)	.01	-.09	-.03	-.13	-.17	-.14	.01	-.15	.07	-.02	.07	-.04
恥	0.96 (0.92)	.20†	.18	.06	.06	.09	.14	.12	.16	.02	.04	.22*	.25*
罪悪感	1.19 (1.01)	.27*	.30**	.25*	.15	.17	.22*	.24*	.31**	-.05	.13	.17	.16
不安	2.29 (1.08)	.33**	.28*	.41**	.35**	.09	.15	.27*	.42**	.15	.22†	.24*	.18
抑うつ	1.74 (1.07)	.26*	.23*	.13	.14	.24*	.29**	.20†	.37**	-.09	-.02	.10	.20†
快活さ	1.65 (1.01)	.05	-.02	.03	-.06	-.22†	-.10	-.03	-.08	-.02	-.03	.04	-.01
倦怠感	1.31 (0.98)	.29**	.18	.21†	.06	.13	.18	.32**	.42**	.07	.03	.18	.23*
焦燥感	1.71 (1.12)	.29**	.26*	.31**	.27*	.09	.19†	.32**	.37**	.13	.17	.21†	.32**
混合感情	2.62 (0.93)	.26*	.41**	.30**	.33**	.02	.12	.28*	.39**	.04	.23*	.32**	.41**
平均値 (SD)	2.24 (0.69)	2.28 (0.73)	2.90 (0.70)	2.94 (0.74)	2.52 (0.69)	2.52 (0.69)	2.56 (0.71)	2.43 (0.70)	2.57 (0.73)	2.32 (0.89)	2.53 (0.88)	2.00 (0.86)	2.09 (0.94)

注) 各得点の取り得る範囲は0-4。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ .

いていた。この4因子のうち気恥ずかしさは、照れ・はにかみ、対人緊張という下位因子構造をもち、かつこ悪さ、自己不全感の上位には恥の意識という因子を想定することができる(成田, 1993; 有光, 2001a より引用)。そこで本研究では、上記のように照れ、恥と罪悪感をそれぞれの制御変数として偏相関係数を求めた。

ところで有光(2006)では、罪悪感、羞恥心と共感性との関係を検討するため、想像力、視点取得、共感的関心、個人的苦痛の4因子からなる多次元共感性尺度を用いていた。前述したように、内的他者意識や空想的他者意識は共感的関心や視点取得と関連すると考えられる。そこで、罪悪感を制御変数とした場合の照れや恥と内的他者意識、空想的他者意識との偏相関係数、および、照れと恥を制御変数とした場合の罪悪感とこれらの他者意識との偏相関係数も求めた。さらに、感情としての共感を共感性の表れとして取り上げることとした。以上の偏相関係数はTable 2にまとめた。なお、照れ、恥、罪悪感と共感との相関係数は、それぞれ.33, .36, .17であった。

Table 2 からわかるように、自己意識や他者意識との間に有意な偏相関係数がみられたのは、主に罪悪感であった。しかし、罪悪感と共感との偏相関係数は、有意ではなかった。一方、照れ、恥は共感との偏相関係数が有意であり、その他は、恥と空想的他者意識の偏相関係数に有意傾向が示された。

感情の違いが自己意識・他者意識の高さや変化に及ぼす影響

経験した感情の違いによって参加者を分類するため、各感情得点に基づきWard法によるクラスタ分析を行い、5つのクラスタを抽出した。分析にはSPSS 12.0 for Windowsを用いた。

各クラスタの平均年齢(SD)を算出したところ、19.73(0.77), 19.57(0.73), 19.52(0.50), 22.17(5.95), 19.83(1.40)であった。年齢に対する1要因分散分析の結果、クラスタの主効果に有意傾向がみられた( $F(4, 75) = 2.47, p < .10$ )。ライアン法により有意水準5%で多重比較を行うと、クラスタ3と4の差が有意であった(多重比較の有意水準を10%にした場合も結果は同じであった)。この年齢差はクラスタ4に41歳の参加

者が含まれていたためと考えられる。ただし、上述のようにクラスタの主効果は有意傾向であり、クラスタ3と4以外は年齢差が有意ではなかった。また、この参加者のデータを除いた場合と除かない場合とで、クラスタの特徴に大きな違いはなかった。したがって、以下の分析からこの参加者のデータを外さなかった。なお、分散分析にはANOVA 4 Ver. 1.10を使用した(以下も同様である)。

クラスタ別の各感情得点の平均とSDをTable 3に示す。これらの得点に対し、クラスタ(5)×感情の種類(18)の2要因分散分析を行ったところ、主効果および交互作用がすべて有意であった( $F(4, 75) = 49.64; F(17, 1275) = 26.06; F(68, 1275) = 8.37; ps < .01$ )。クラスタは参加者間、感情の種類は参加者内要因である。

クラスタの主効果における多重比較をライアン法によって有意水準5%で行ったところ、クラスタ4は他のクラスタよりも有意に低かった。また、クラスタ1と5は、クラスタ2と3よりも有意に低かった。感情別にみた場合のクラスタ間の多重比較の結果を、以下に簡単にまとめる。結果の詳細はTable 3に示した。

まずクラスタ1をみると、得点の高いまとまりに入るか低いまとまりに入るかは、感情によって異なっていた。クラスタ5も同様であった。クラスタ3は、全感情得点が1を超え、驚き、嫌悪、怒り以外では1番目か2番目に高い(驚き、嫌悪、怒りでも3番目に高い)。多重比較の結果においても、多くの感情で1番目か2番目に得点の高いまとまりに入っていた。クラスタ2も多くの感情で得点が1番目か2番目に高いまとまりに入っているが、喜び、照れ、誇り、快活さの得点が非常に低い。他方、恐れ、嫌悪、怒り、悲しみ、恥、罪悪感、不安、抑うつ、倦怠感、焦燥感といったネガティブな感情の得点が高く、特に、恐れ、嫌悪、悲しみ、罪悪感、抑うつにおいては、他のクラスタより感情得点が有意に高かった。クラスタ4は、感情を込みにした場合と同様に、すべての感情で最も得点の低いまとまりに入っており、喜び、驚き、不安、混合感情以外では、感情得点が1に満たなかった。

感情間の差は、Figure 1に示すようにクラスタにより大きく異なっていた。

Table 2 罪悪感を制御した場合の照れまたは恥、および、照れと恥を制御した場合の罪悪感と、自己意識・他者意識、共感との偏相関係数

感情	自己意識尺度				他者意識尺度				共感
	私的自己意識		公的自己意識		内的他者意識		空想的他者意識		
	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	1 回目	2 回目	
照れ	-.05	-.05	.08	.05	.08	-.06	.16	.17	.28**
恥	.10	.06	-.05	-.01	.02	.03	.17	.21†	.32**
罪悪感	.21†	.25*	.24*	.14	.21†	.28*	.08	.06	.02

注)  $N = 80$ 。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .05$ 。

Table 3 クラスタ別の各感情得点の平均 (SD)

感情	クラスタ					各感情でのクラスタ間の 多重比較の結果
	1 (n = 15)	2 (n = 7)	3 (n = 23)	4 (n = 12)	5 (n = 23)	
喜び	1.10 (0.66)	0.76 (0.59)	2.86 (0.75)	1.31 (0.89)	2.79 (0.87)	2 = 1 = 4 < 5 = 3
恐れ	1.11 (0.84)	2.88 (1.24)	1.90 (0.86)	0.69 (0.76)	1.05 (0.72)	4 = 5 = 1 < 3 < 2
驚き	1.61 (0.97)	2.17 (1.31)	1.98 (0.90)	1.19 (0.99)	2.38 (1.09)	4 = 1 < 5
嫌悪	2.33 (0.85)	3.45 (0.39)	2.20 (0.70)	0.79 (0.53)	0.85 (0.57)	4 = 5 < 3 = 1 < 2
怒り	2.36 (0.92)	3.14 (0.71)	2.07 (0.56)	0.47 (0.58)	0.70 (0.67)	4 = 5 < 3, 1, 2; 3 < 2
悲しみ	1.83 (0.88)	3.26 (0.73)	2.10 (0.71)	0.76 (0.50)	1.37 (0.90)	4, 5, 1, 3 < 2; 4 < 1 = 3; 5 < 3
照れ	0.98 (0.79)	0.31 (0.46)	2.01 (0.95)	0.42 (0.49)	1.71 (0.93)	2 = 4 = 1 < 5 = 3
共感	1.10 (0.73)	1.50 (1.14)	2.55 (0.87)	0.83 (1.02)	2.07 (1.05)	4 = 1 < 5 = 3; 2 < 3
羨望	0.38 (0.47)	1.71 (1.03)	2.02 (0.85)	0.47 (0.63)	1.06 (0.75)	1 = 4 < 2 = 3; 5 < 3
誇り	0.60 (0.59)	0.00 (0.00)	1.32 (0.73)	0.22 (0.34)	0.96 (0.90)	2 = 4 = 1 < 3; 2 < 5
恥	0.80 (0.74)	1.67 (1.34)	1.42 (0.84)	0.25 (0.39)	0.78 (0.75)	4 < 2; 4 = 5 < 3
罪悪感	1.21 (0.93)	2.45 (0.92)	1.38 (0.90)	0.40 (0.43)	1.01 (0.96)	4, 5, 1, 3 < 2; 4 < 3
不安	2.11 (0.72)	3.50 (0.46)	3.07 (0.66)	1.22 (1.09)	1.80 (0.81)	4, 5, 1 < 3 = 2; 4 < 1
抑うつ	2.04 (0.68)	3.64 (0.57)	2.09 (0.71)	0.92 (0.77)	1.05 (0.81)	4 = 5 < 1 = 3 < 2
快活さ	1.19 (0.59)	0.62 (0.58)	2.46 (0.69)	0.67 (0.54)	1.95 (0.92)	4 = 2 = 1 < 5 = 3
倦怠感	1.31 (0.65)	2.71 (0.98)	1.94 (0.63)	0.36 (0.40)	0.74 (0.72)	4, 5, 1 < 3 = 2; 4 < 1
焦燥感	2.07 (0.73)	2.88 (1.11)	2.52 (0.69)	0.61 (0.56)	0.89 (0.72)	4 = 5 < 1 = 3 = 2
混合感情	2.83 (0.61)	3.10 (0.92)	2.99 (0.79)	1.58 (0.84)	2.52 (0.86)	4 < 5 = 1 = 3 = 2

注) 不等号記号はライオン法による多重比較の結果、差が5%水準で有意であったことを、等号記号は有意ではなかったことを表す。表に比較結果が記載していないクラスタ間の差は有意ではなかった。

クラスタ 1

羨望	誇り	恥	照れ	共感	喜	恐	快活	罪悪	倦怠	驚	悲	抑うつ	焦燥	不安	嫌悪	怒	混合
A												<					B
A										<					B		
A							<							B			
A				<								B					
A				<							B						
A			<									B					
A			<								B						
A		<									B						
A		<								B							

クラスタ 2

誇り	照れ	快活	喜	共感	恥	羨望	驚	罪悪	倦怠	恐	焦燥	混合	怒	悲	嫌悪	不安	抑うつ
A								<								B	
A							<					B					
A					<						B						
A				<					B								
A				<			B										
A		<			B												
A	<			B													

クラスタ 3

誇り	罪悪	恥	恐	倦怠	驚	照れ	羨望	怒	抑うつ	悲	嫌悪	快活	焦燥	共感	喜	混合	不安
A												<				B	
A												<				B	
A		<										B					
A		<										B					

クラスタ 4

誇り	恥	倦怠	罪悪	照れ	怒	羨望	焦燥	快活	恐	悲	嫌悪	共感	抑うつ	驚	不安	喜	混合
A							<										B

クラスタ 5

怒	倦怠	恥	嫌悪	焦燥	誇り	罪悪	恐	抑うつ	羨望	悲	照れ	不安	快活	共感	驚	混合	喜
A																<	B
A												<			B		
A										<				B			
A									<	B							
A					<					B							

Figure 1. 感情の種類の単純主効果における多重比較の結果 (有意水準 5%, ライオン法による)。同じ行の網掛け A の感情は網掛け B の感情より有意に低いことを表す。

小嶋（2007）では、混合感情の他に併存感情数も感情の複雑性の指標としていた（この値は以下の式によって算出する：様々な感情が入り混じった気持ち以外で評定が1以上であった感情の個数÷感情経験の調査に参加した回数）。そこで、クラスタごとに併存感情数の平均（SD）を求めると、クラスタ1～5の順に9.94（2.62）、11.12（1.77）、14.66（2.21）、4.99（2.60）、9.96（2.87）であった。1要因の分散分析の結果、クラスタの主効果が有意で（ $F(4, 75) = 28.63, p < .01$ ）、クラスタ3は他のクラスタよりも併存感情数が有意に多く、逆にクラスタ4は他のクラスタよりも有意に少なかった。クラスタ4は混合感情の得点においても、他のクラスタとの差が有意であった（Table 3）。

以上、Table 3、Figure 1、および併存感情数の結果を整理すると、クラスタ1はネガティブな感情を中程度に強く感じるタイプ、クラスタ2はネガティブな感情を強く感じるタイプといえよう。またクラスタ2は、罪悪感の得点が他のクラスタよりも高く、かつ、他の感情と比較した場合に中程度に高い（最も感情得点の低いグループに入る感情との差が有意であった）こと、恥の得点も、罪悪感ほどではないが、他のクラスタに比べると高いことが、特徴としてあげられる。クラスタ3は、感情の複雑性が他のクラスタに比べて若干高く、全般的に感情を強く感じているタイプである。特に喜び、快活さなどポジティブな感情を強く感じるが、一方で不安も強く感じている。クラスタ4は感情の複雑性が特に低く、全体的に感情が弱いタイプ、クラスタ5は喜びが特に強く、ポジティブな感情を中程度かやや強く感じているタイプといえよう。

以上のような特徴を持つクラスタ別に、自己意識・他者意識の各下位尺度得点を算出した（Table 4）。これらの得点に基づき、各下位尺度ごとにクラスタ（5）×調査時期（2）の分散分析を行った。

分散分析の結果、私的自己意識と社会的不安では、クラスタの主効果のみに有意または有意傾向がみられた（ $F(4, 75) = 6.86, p < .01$ ;  $F(4, 75) = 2.38, p < .10$ ）。クラスタの主効果における多重比較をライアン法で行ったところ、クラスタ2の私的自己意識が他のクラ

スタよりも有意に高かった（有意水準5%）。社会的不安については、有意水準を10%にした場合、クラスタ2と5の差が有意であった。

内的他者意識と外的他者意識は調査時期の主効果が有意で（ $F(1, 75) = 11.23, p < .01$ ;  $F(1, 75) = 5.32, p < .05$ ）、いずれも2回目の方が得点が高かった。

内的他者意識ではクラスタの主効果とクラスタと調査時期の交互作用も有意であった（ $F(4, 75) = 3.93, p < .01$ ;  $F(4, 75) = 2.55, p < .05$ ）。調査時期を込みにした場合、クラスタ2と3はクラスタ5よりも得点がありに高かった。交互作用の下位検定の結果、2回目の調査においてクラスタの単純主効果が有意で（ $F(4, 150) = 5.52, p < .01$ ）、クラスタ2はクラスタ1、4、5よりも、クラスタ3はクラスタ5よりも内的他者意識が有意に高かった。調査時期の単純主効果が有意だったのはクラスタ2のみであった（ $F(1, 75) = 18.87, p < .01$ ）。また、1回目の調査におけるクラスタの単純主効果にも有意傾向がみられた（ $F(4, 150) = 1.99, p < .10$ ）。

公的自己意識と空想的他者意識においては、クラスタの主効果、調査時期の主効果、両者の交互作用のいずれも有意ではなかった（ $F(4, 75) = 1.45, 0.86$ ;  $F(1, 75) = 0.29, 1.36$ ;  $F(4, 75) = 1.05, 0.12$ ）。

## 考察

本研究の第一の目的は、感情別に自己意識および他者意識との関係を検討することであった。

その特性から考えると、自己意識的感情と自己意識の間には有意な相関が示されると予測される。しかし、本研究において自己意識のすべての側面との間に有意な相関がみられた自己意識的感情は、罪悪感のみであった。その他は羨望や恥と私的自己意識の相関が有意傾向であり、照れと社会的不安の間には有意な負の相関がみられた。自己意識的感情はその他の感情に比べて有意な相関係数の割合が高いということもなかった。

日本において罪悪感や恥の類似点、相違点について研究している有光（2001a, 2006）と本研究の結果を比較すると、罪悪感に関しては有光（2001a）から予測さ

Table 4 クラスタ別の自己意識・他者意識の下位尺度得点の平均（SD）

クラスタ	自己意識尺度						他者意識尺度					
	私的自己意識		公的自己意識		社会的不安		内的他者意識		外的他者意識		空想的他者意識	
	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目	1回目	2回目
1	2.14 (0.54)	2.08 (0.72)	2.95 (0.51)	3.05 (0.56)	2.54 (0.86)	2.66 (0.84)	2.34 (0.76)	2.44 (0.70)	2.33 (0.69)	2.72 (0.62)	1.97 (0.97)	2.12 (0.99)
2	2.96 (0.82)	3.14 (0.63)	3.20 (0.57)	3.04 (0.94)	3.10 (0.53)	3.05 (0.62)	2.78 (0.48)	3.35 (0.39)	2.43 (0.84)	2.54 (0.98)	2.25 (0.87)	2.32 (0.92)
3	2.42 (0.66)	2.38 (0.67)	3.12 (0.54)	3.12 (0.50)	2.51 (0.63)	2.67 (0.63)	2.69 (0.52)	2.82 (0.51)	2.58 (0.71)	2.70 (0.86)	2.18 (0.77)	2.33 (0.72)
4	1.92 (0.65)	1.85 (0.69)	2.52 (0.71)	2.73 (0.82)	2.57 (0.61)	2.50 (0.60)	2.36 (0.85)	2.45 (0.80)	2.40 (1.04)	2.58 (0.79)	1.75 (0.92)	1.81 (1.05)
5	2.09 (0.59)	2.29 (0.58)	2.76 (0.83)	2.77 (0.84)	2.32 (0.59)	2.25 (0.65)	2.14 (0.64)	2.24 (0.73)	1.98 (0.97)	2.22 (0.98)	1.89 (0.78)	1.90 (0.97)

れる結果と一致し、照れと恥の影響を除去する前も後も、罪悪感と私的自己意識との間に有意な正の相関が示された。罪悪感と他者意識との関係も、先行研究(有光, 2006)から予測される結果と一致した。具体的には、有光(2006)では、罪悪感と視点取得や共感的関心の間に正の相関が示されており、本研究でも、共感性のこれらの側面と関連がある内的他者意識と罪悪感の関係は、相関係数、偏相関係数の両方で有意または有意傾向であった。ただし、罪悪感と公的自己意識との偏相関係数が有意であった点と、共感感情と罪悪感の偏相関係数が有意でなかった点是有光(2001a, 2006)と異なっていた。

照れや恥と自己意識の関係については、先行研究と一致しない点が多かった。有光(2001a)では、照れを下位因子にもつと考えられる気恥ずかしさや、恥の意識の下位因子であるかっこ悪さと自己不安全感は、公的自己意識と有意な正の関係にあり、罪悪感を制御した場合もこの関係は保たれていた。また、女性の場合、罪悪感の影響を取り除く前は気恥ずかしさと私的自己意識の相関は有意ではなく、自己不安全感と私的自己意識の間に有意な正の相関がみられたが、罪悪感の影響を取り除くと前者の間に有意な負の相関が示され、後者の相関は有意でなくなった。これに対し本研究では、照れおよび恥と公的自己意識の間の相関係数、偏相関係数のいずれも有意ではなかった。また、照れと私的自己意識の相関もまったく有意ではなかった。

他者意識との関係をみると、照れと空想的他者意識(この意識は視点取得と正の関係にある)の相関係数は有意傾向であったが、罪悪感の影響を取り除くと、相関は有意でなくなった。恥に関しては、空想的他者意識との間に有意な正の相関がみられ、罪悪感を制御変数とした場合の偏相関係数は有意傾向であった。また照れと恥のいずれも、共感感情との間に有意な正の偏相関係数が示された。有光(2006)では、女性の場合、罪悪感を制御するかどうかにかかわらず、気恥ずかしさと視点取得や共感的関心との相関は有意でなかった。また、かっこ悪さや自己不安全感と視点取得、自己不安全感と共感的関心の間に有意な正の相関がみられたが、罪悪感の影響を取り除くと、有意な関係はみられなくなった。以上のように、照れや恥と他者意識との関係に関しては、本研究は有光(2006)と一致する結果もあった。

以上のように、本研究における感情と自己意識・他者意識との関係は、罪悪感以外では予測や先行研究と異なる点が多くみられた。この原因として、本研究の手続きが考えられる。特に、感情を抱いた出来事の内容を統制していなかったことが大きく影響しているのではないだろうか。また、Table 1の各感情の平均得点をみると、得点の低い感情から順に誇り、恥、羨望、罪悪感と続き、倦怠感をはさんで照れとなる。中でも

誇りと恥は平均得点が1に満たず、まったく感じていなかった参加者も20名を超えていた。このように、そもそも自己意識的感情を感じていなかった参加者が多かったことも結果が予測と一致しなかった原因の一つであろう。この他、感情としての共感を共感性の表れとみなしたことも原因の一つと考えられる。すなわち、感情としての共感が、共感的関心や視点取得を反映している場合と個人的苦痛を反映している場合が混在しており、そのため先行研究と異なる結果が示された可能性がある。

次に、感情経験が自己意識や他者意識に与える影響における、感情の種類による違いについて検討する。本研究では、クラスタ分析に基づき参加者を5タイプに分けた。クラスタによって自己意識、他者意識の高さやその変化が異なるかどうかを分析したところ、私的自己意識では、ネガティブな感情の得点が高く、罪悪感や恥の得点も比較的高いクラスタ2と、その他のクラスタの差が有意であった。感情経験の調査の前後で内的他者意識が変化していたのも、クラスタ2においてであった。なお、感情得点が全般的に高いクラスタ3においても他者意識、特に内的他者意識が比較的高かった。

ところで各クラスタの混合感情と併存感情数からは、クラスタ3の感情の複雑性が最も高く、次いでクラスタ1, 2, 5,そして、クラスタ4が最も低いといえよう。偏相関係数の値も合わせて考えると、単に感情の複雑性が高いだけでなく様々な感情を全般的に強く感じる人は、内的他者意識が高く、また、感情の複雑性の高さに加えて罪悪感や恥、特に罪悪感を比較的強く感じる人、あるいはそのような感情経験は、高い私的自己意識や公的自己意識、内的他者意識の上昇と結びつきやすいことが推測される。すなわち、感情の複雑性が同程度であっても、経験する感情の種類によって自己意識や他者意識との関係が異なる可能性が示唆される。

罪悪感、恥、共感性は、道徳性において重要な役割を果たす道徳的感情とみなされている(Eisenberg, 2000; 永房, 2006参照)。また、罪悪感社会的活動障害に負の影響を与える(有光, 2001b)。本研究の結果はこうした見解を、間接的にはあるが、支持するものである。

ただし、私的自己意識、内的他者意識以外では、クラスタの差は有意でなかった。したがって、罪悪感の感じやすさ、あるいは罪悪感を感じる経験の影響が他の要因と比べて突出して大きいわけではないだろう。

さらに、強いネガティブ感情が精神的な健康や社会的行動に及ぼす影響に配慮する必要がある。有光(2001b)によると、恥特性は、不安、不眠、社会的活動障害に正の影響を与える。一般に、強いネガティブ

情動性（怒り，恐れ，不安，悲しみなどを含む）は向社会的行動と負の関係にある（Eisenberg, 2000; Eisenberg, Fabes, & Spinrad, 2006参照）。また，気恥ずかしさは個人的苦痛と正の関係にあり，女性では罪悪感と個人的苦痛が，男性ではかっこ悪さと個人的苦痛が，それぞれ羞恥心と罪悪感の影響を取り除いた場合も正の関係にある（有光，2006）。ただし，ネガティブ情動性と向社会的行動との関係は単純ではなく，Eisenberg ら（2006）は，同情を経験するか，個人的苦痛を感じるかは感情の強さと感情反応を制御する能力によって決まると考えている。すなわち，適切に感情を制御できる人は，感情の強さに関わらずネガティブな代理感情を調整し，感情の覚醒を望ましいレベルに維持できると推測される。したがって，今後，感情経験や自己意識・他者意識だけでなく，感情制御，社会的行動との関係についても調べ，精神健康上望ましく，かつ，向社会的行動や高い道徳性につながるような感情経験の特徴を明らかにしていくことが必要であろう。

## 引用文献

- 有光興記(2001a)．罪悪感，羞恥心と性格特性の関係 性格心理学研究，**9**，71-86.
- 有光興記(2001b)．罪悪感，恥と精神的健康との関係 健康心理学研究，**14**，24-31.
- 有光興記(2006)．罪悪感，羞恥心と共感性の関係 心理学研究，**77**，97-104.
- Eisenberg, N. (2000) Emotion, regulation, and moral development. *Annual Review of Psychology*, **51**, 665-697.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., & Spinrad, T. L. (2006) Prosocial Development. In W. Damon & R. M. Lerner (Series Eds.) & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology. Vol. 3. Social, emotional, and personality development*. 6th ed. New

Jersey: John Wiley & Sons, pp. 646-718.

- 樋口匡貴(2002)．公恥状況および私恥状況における恥の発生メカニズム 恥の下位情緒別の発生プロセスの検討 感情心理学研究，**9**，112-120.
- Kang, S., & Shaver, P. R.(2004)．Individual differences in emotional complexity: Their psychological implications. *Journal of Personality*, **72**, 687-726.
- 小嶋佳子(2007)．感情経験と自己意識・他者意識の関係 感情の複雑性と意識化が自己意識・他者意識に及ぼす影響 愛知教育大学研究報告，**56**（教育科学編），147-154.
- 小嶋佳子・森田愛子・松田文子(2004)．感情の相互抑制に対する感情強度の影響 日本心理学会第68回大会発表論文集，913.
- Lewis, M.(2000) The emergence of human emotions. In M. Lewis & J. M. Haviland-Jones (Eds.), *Handbook of emotions*. 2nd ed. New York: Guilford Press, pp. 265-280.
- Lewis, M., Sullivan, M. W., Stanger, C., & Weiss, M. (1989) Self development and self-conscious emotions. *Child Development*, **60**, 146-156.
- 永房典之(2006)．自己意識感情とその働き 北村英哉・木村晴（編）感情研究の新展開 ナカニシヤ出版 pp. 169-189.
- 辻平治郎(1993)．自己意識と他者意識 北大路書房

## 注

- 1 辻はempathic concernを同情的関心と訳しているが，empathyは共感と訳されることが多いことから，ここでは共感的関心と記した。
- 2 本研究の方法は，小嶋（2007）と同一である。したがって，方法の詳細は，小嶋（2007）を参照されたい。

## 付記

複数回にわたる調査に参加して下さった参加者の皆様に，深く感謝いたします。

（平成19年9月18日受理）